

研究を仕事として続けてきて感じるのは継続の重要性である。私たちの研究は実験の積み重ねである。実験がうまく進まなければ、研究自体が成り立たないが、小さな実験ひとつをとっても、すんなりと事が運ぶことはまずないと考えた方がよい。幾度かの試行錯誤が常に必要と言える。実験の失敗を踏まえて、その原因を把握するという経験を積み、失敗の回数を減らすことは可能となる。しかし、失敗続きで、嫌気が差すこともある。実験の成功に伴って新たな知見を見出すという楽しさがなければ、研究を続ける意志が希薄となっても致し方ないのかもしれない。そこが勝負所である。投げ出すか、やり遂げるか。継続することによって得られるものが少なからずあると実感している。一方で目的達成のためには、研究の方向性を見定めること、具体的な研究戦略を決定すること、そして戦略を遂行するための能力を備

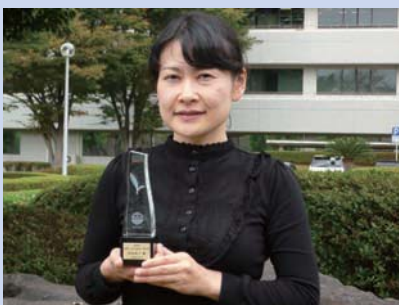
えていることが大事だと痛感している。

持てる力を総動員して未知の相手とストロークをやり取りするのが、テニスの楽しさである。試合に勝つには、負けた経験を踏まえて、敗因を乗り越えるための技術面・精神面の鍛錬が必要だろう。研究においては、昨日手懸けた実験の結果を、今朝わくわくしながら観察するのが楽しみである。新たな知見を手にするには、研究実践に必要な能力を磨きながら、実験の失敗を乗り越えて進んでいくことが求められる。成功に浮かれず、失敗にくじけず、鍛錬を忘れずに、しっかりと目標をもって突き進む。楽しければ、続けることができる。これからの私の目標はシングルス大会に20年間連続出場すること、そしてこれまで続けてきた研究課題を若い研究者とともに完成させることである。楽しむ気持ちを忘れずに。

TOPICS

NARO Research Prize 2009の受賞

平成21年度第4回農研機構役員会(9月17日)でNARO Research Prize 2009の授賞式が行われ、理事長より人獣感染症研究チーム内田裕子研究員に表彰状と記念のトロフィーが授与されました。



表彰対象研究成果

「オオハクチョウから分離された高病原性鳥インフルエンザウイルスの侵入経路の推定」

研究の概要

2008年4月、秋田県十和田湖畔で死亡したオオハクチョウがH5N1亜型高病原性鳥インフルエンザウイルスに感染していたことを確認した。分離されたウイルスのHA遺伝子は、過去に日本で分離されたウイルスとは異なる遺伝子系統に属し、HA蛋白質の抗原性も明らかに異なっていた。従って、オオハクチョウの感染は、以前に日本で発生した高病原性鳥インフルエンザの再発では

ない。4月はオオハクチョウの日本への飛来時期ではないため、国外で感染したオオハクチョウが国内で死亡したのではなく、国外から侵入したウイルスに日本国内で感染した可能性が考えられる。

(研究調整役)

NARO Research Prize 2009とは・・・農研機構の前年度(今回は20年度)の主要な研究成果の中から、理事長が社会的、経済的、または学術的にインパクトの高い優れた研究成果を選定し表彰するもので、今回は5課題が表彰されています。